

れば身より悪用まひあがる也

〔武江産物志〕水鳥類 鶯昌平橋外

〔新撰字鏡〕鳥鶯浦寛反、爾保、鶯他奚反、爾保、鶯爾保

〔倭名類聚抄羽族名〕鶯鶯郭璞方言注云、鶯鶯、和名爾保、野鳧、小而好沒水中也、野王按、鶯鶯其膏可

以瑩刀劔者也、

〔箋注倭名類聚抄鳥名〕方言卷八云、野鳧其小而好沒水中者、南楚之外謂之鶯鶯、無注、此注一字恐

衍、下總本鶯作鶯、那波本同、與原書合、南都賦作鶯鶯、與舊合、說文作鶯鶯、按鶯即鶯字、唳或作啼、唳

或作蹄、故鶯亦作鶯、又題肩俗作鶯鶯、遂混無別、新撰字鏡亦鶯字、鶯字並訓爾保、則此作鶯、恐係後

人校改、非源君之舊也、略○中今本原書玉只云鶯鶯水鳥、無載此所引文、按爾雅郭注、鶯鶯似鳧而

小、膏中瑩刀、後漢書馬融傳注引方言曰、野鳧也、甚小、好沒水中、膏可以瑩刀劔、與此略同、蓋古本玉

篇引之、今本逸脫也、略○中陳藏器曰、鶯鶯、水鳥也、如鳩、鳴脚連尾、不能陸行、常在水中、人至即沈、或擊

之便起、

〔類聚名義抄鳥〕鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ

〔下學集上〕鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ

〔瑤囊抄〕鳥類字 鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ 鶯鶯鶯ニホ

〔八雲御抄三〕鶯鶯鶯ニホ にほとり うきすはうきてすをくうなり たまもにあそぶ 水底をく、

るゆへに下道と云 万にほとりのふたりならびてかたらひし、

〔藻鹽草十〕鶯

鶯鳥 鶯のうきす略註 あしの葉つなぐうきす 鶯鳥のふたりならびてかたよびし 鶯の

下道水底をく 鶯の水底をく 鶯の水底をく 鶯の水底をく 鶯の水底をく 鶯の水底をく 鶯の水底をく 鶯の水底をく 鶯の水底をく 鶯の水底をく